

札幌市立屯田北小学校の取組【雪に関する教育課程】

1. 研究のねらい

本校は、札幌市北部に位置し、日本海側から入り込む偏西風の影響で冬期間の降雪量が多い。家庭では除雪に追われることも多く、雪と「親しむ」という感覚は子どもにもあまりないように思われる。そのためか、冬期間に外で遊ぶ子どもはあまり多くは見られない。また、スキー場から離れていることもあり、スキー経験が豊富な子は少ない。そこで、本校では「雪の学習活動」を教育課程に位置付け、低学年では生活科「スノーランド」の開催、中学年では総合的な学習の時間「防風林の雪探検」、高学年では総合的な学習の時間「雪の学習プレゼンテーション」を通して、雪と親しむ機会を設けている。これらの活動を系統的に行っていくことで雪を親しみ楽しむ子どもたちを育てたい。

2. 取組内容

(1) 2年生生活科「あっぱれスノーランド」

① 1学期から継続した取組として

人との交わりを大切にしている本校2年生の生活科では、1学期には友達と協力して「まちたんけん」を行い、友達のよさやまちにはどんな人がいるのかを学んでいる。2学期には、「夢ランド」で、学校のたくさん仲間を楽しませるお店をつくろうと、創作活動を行ってきた。

そして3学期は、地域の保育園のお友達を招待して「ゆきまつり」を行おうと、2年生なりに相手意識をもって活動に取り組んだ。まずは、自分たちが外に出て、雪を使って遊びながら雪の特徴を生活経験と織り交ぜながら再発見していく。雪遊びが得意な子もいれば、あまり外で遊んだことがない子もいる。そのような状況を踏まえ、生活科の中でたくさん遊ぶことで、雪に対するイメージの共有化を図っていった。

② 雪を通して友達を増やす

2年生のそれまでの活動では自分たちが楽しもうという思いが強かったが、この3学期の活動では「相手意識」を育てる学習計画になっている。「自分たちよりも幼い保育園児たちが楽しめる雪遊びは何か？」

「自分たちと同じことはできないよ」「けがをしたら困るから安全にしよう」などと、2年生ながらに考えて計画する姿が見られた。

(2) 5年生総合「Let's 雪タイム」

① 雪が嫌いな大人が多い？

冬になると、雪が降ることに嫌がる大人が多い。実際に両親に聞いてみても、雪をやっかいなものに感じ



ている大人が多く、札幌市の世論調査でも除雪に関することへの要望が毎年1位となっている。5年生ではこの雪に対するマイナスイメージを無くすために、雪のよさを探す活動を行った。

活動はグループに分かれ協働的に行っている。あるグループは雪と言えば「さっぽろ雪まつり」だと考え、雪まつりに実際に行き、雪像について観察したり、来場者にインタビューしたりするなどして、雪まつりのよさや課題を見付けた。また、自分たちも低学年が楽しめる雪像をつくってみようと、グラウンドに試行錯誤しながら雪像をつくり低学年に遊んでもらうことなども行っている。



②「よさ」から「課題」へ

雪の「よさ」を調べていく中で、各グループはよさだけではなく「課題」があることにも気付いていく。例えば、高齢者の人たちが家の除雪に困っていることに気付き、「この問題をどのように解決しようとしているのか」などの問題意識をもち、調査を行った。「福祉除雪」という取組を知り、自分たちにできることはないかと考え、高齢者体験セットを装着して除雪活動を行うなどして高齢者の立場で考えることができた。

最終的には雪に対する「よさ」や「課題」をまとめたプレゼンテーションを作成し、保護者の前で主張することができた。また、その中から選出されたチームが札幌市建設局雪対策室主催の「雪と暮らすおはなし発表会」に参加し、学習の成果を発表した。

3. 成果と課題

(1) 成果

雪の学習を系統立て、生活科や総合的な学習の時間に位置付けてから4年目となる。今年5年生の子どもたちは、低学年の頃から雪と親しむ教育課程で育ってきていることもあり、雪に対しての愛着が強いように感じられる。また、教育課程に位置付けることで、低学年では「雪とどう仲良くなるか」、中学年では「雪と自然」、高学年では「雪と地域社会」といったように、「造形的側面」「環境的側面」「社会的側面」など、雪に対する多面的な見方を育てることができている。

(2) 課題

今後は、各学年の取組が他の学年に伝わるような工夫を考えたい。ワークスペースという校舎の構造のため、異学年交流が難しい部分がある。また、毎年、前年度の活動の引継ぎや記録化を確実にを行い、「雪のカリキュラム」を見える化し、協力してくださる地域や専門の方々へ失礼のないように、全ての準備・計画を学校としてパッケージ化し、継続していくことが必要である。